

- 屋根下地葺き。下地用材。

一番大切なことは、屋根葺き材種による野地材・下地葺の材料の選び方や、軒先の処理工法を間違いない。近年は選び方、工法に間違いが多すぎる。

長い歴史を持つ和型瓦(本瓦・棧瓦)葺き、野地材(浄化性に富む)として、杉板材(小幅板・拵板)や雌竹(めだけ)・割竹・葎(はし)などを張り込みとし、下地葺きには、杉皮葺き、柿(にけら)板葺き。(最近では柿板をロール状に作られ(通称トントン葺き)、等で押え止めに割竹や萱(か)り・銅線(銅板切く)等で押えられていた。

近年は下地葺材としてアスルーフィング、ゴムアスルーフィング等が使用されてきたが野地板が下地合板が多くなり、結露防湿換流がわるい為、下地のいたみやすく、また軒先仕舞に欠陥が起り、耐久性のない状態となってきた。

最近では下地葺材が開発されたシート材(防水性や透湿性を備える材料)が多く使用される様になった。

★結露防湿換流性のよい、野地材・下地葺き材の使用材を考え、特に軒先廻りの下地葺材の水仕舞いや換流を考えた、設計や施工する様心掛けること。

- ◆ 4. 1 階小屋組 → 水平グループ

2階小屋組(水平グループ)の項に記述した内容に基本的に準ずる。

○一般的に軒天端を2階胴差天端より240~300mm(.8~1尺)位下げる。

- ◆ 4' 1 階小屋組 → 勾配グループ

2階小屋組(勾配グループ)の項に記述した内容に基本的に準ずる。

- ◆ 小屋組材木口銅板包みに付いて。

軒廻りの化粧材木鼻、軒桁、棟木、母屋、隅木、谷木、垂木掛け、垂木、破風尻、等の雨水の掛りやすい部材の木鼻に、銅板包みがされているのは木材保護の爲である。銅板の緑青のさびが水にぬれ銅イオンが発生し木材にふれると木材の防腐強度対策に極めてよく木材の耐久性が特に延びる。

- ◆ 木造の小屋組は、本来組み方は簡単なものではない。継手や仕口は、デリケートな手数のかかるものなので、こみいったものにしないで、できるだけ単純なものに整理して考えるべきである。 [平面プランを考える時に構造に配慮をしておくこと]

[高低差をできるだけ整理する] [小屋組はできるだけ大きくかける] [こまぎれの小屋組はくるいやすい] [軒廻り蟻羽が化粧の場合は陸組] 現在の木造住宅などでは、構造自体を単純にした構造計画を考えるようになってきた。新たら木材・構造の処理方法も発達・開発され、たとえば構造用金物を使用したもの、構造用集成材による従来の木造軸組構造に使用されるようになった。小屋組の断面も、瓦葺きの小屋、金属板葺き屋根の小屋、特殊な垂木構造(2×4)の小屋と、身近なもので少しずつ変化、発達をしている。何をどのように使うかは設計者それぞれの考え方によるが、材料の性質や、構法の持味に、先人が愛情をそそいで育ててきたように、細かな心づかいを持って、変化、発展をさせたいものである。